

平成二十七年 度

中学校入学試験問題 国語

第一回（二月一日実施）

試験開始の合図があるまで問題用紙は開かず、左記の注意事項をよく読んでおきなさい。

- 一、問題は23ページまであります。足りないページや、印刷のよく見えないページがあったときは、手を上げて申し出てください。
- 二、解答用紙は別になっています。答えはすべてそこに記入してください。
- 三、解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。
- 四、問題用紙には、受験番号・氏名を書く必要はありません。

一

次の文章を読んで、後の1〜15の問いに答えなさい。(問題の都合上、本文を変えているところがあります。)

「やりたいことかあ。早く大人になることかなあ。大人になったら何でも自由に選べるでしょ、ご飯も持ち物も。私、大人になったら自由に名前を選びたいんだ」

「えっ、ダイアナっていう名前、嫌なの？ 可愛いのに」

「可愛くなんてないよ。だーいっくらい」

ダイアナちゃんは鼻にしわを寄せて、いーっと歯をむき出しにしてみせた。いつの間にか、二人は昔からの仲良しみたいに、すっかりくだけた口調になっていた。

「十五歳になったら名前って自由に変えられるんだって。そうしたら私、普通の名前に変えるの。それと、お父さんを探しに行くんだ。こんな名前にしたことの文句を言ってるの」

彼女の話にはぞくぞくさせられる。十五歳、自分で名前を付ける、パパを探す旅。

本当に物語のヒロインみたい。自分の見込み間違いはなかったのだ。ああ、なんて「A」なんだろう。彩子はうっとりとしてダイアナちゃんを見つめた。髪も瞳も透き通り、人を夢中にさせる力を放っている。それでいて、どこか心細そうで、おびえた目をしていた。私を守ってあげなきゃ——。例えば、シエットランドシープドッグのダンが家に来た時、ガールスカウトで上級の女の子に混じって飯盒炊爨を担当した時、二年生の一学期に学級委員に選ばれた時。こんな風に内側から熱が沸き上がるような感覚を味わったものだ。

「でも……。ダイアナっていう名前だと思っよ。私達が仲良くなるきっかけにもなったわけだし……。私は好きだけどな。うちにね、

『秘密の森のダイアナ』っていう絵本があるの。大好きな本なんだ。一緒に読もうよ。パパが作った本なんだ」

「えっ、彩子ちゃんのお父さんって本を書く人なの？」

ダイアナちゃんは、たちまち小さな顔いっぱい尊敬の色をたたえた。

「ううん。『B』者っていう仕事。作家と一緒に本を作るの。今は雑誌だけど、むかしは絵本を作ってたんだ」

「わあ、すごい仕事だね。すごい。すごいね。そんな仕事があるんだね」

本当に本が好きなんだな——。彩子は嬉しくなる。

『秘密の森のダイアナ』は「はっとり けいいち」という人が絵と文を書いた全五巻の物語だ。パパが作った本なので、幼い頃から繰り返し読んで、ほとんど内容を暗記している。意地悪な魔法使いのせいで、両親と生き別れになった少女ダイアナが森の動物や妖精達に助けられ、自分の力で生き抜いていく物語だった。自立して生きていく主人公と、目の前の女の子は綺麗に重なる。父の手がけた本をこの新しい友達が入ってくれたらどんなに幸せなことだろう。

「面白そう。その本、読んでみたいなあ。彩子ちゃんのおうち、素敵だろうなあ」

ダイアナちゃんが我が家にやってくる。想像しただけで「1」して、彩子は公園のさわやかな空気を胸いっぱい吸い込む。三年生は楽しい一年になりそうだ。桜を浮かべた大きな水たまりは、『赤毛のアン』でアンとダイアナが親友になることを誓った花の咲き乱れる庭園や、「輝く湖水」を思わせた。

神崎彩子の家に遊びに行った四月の半ばの日曜日を、ダイアナは一生忘れないだろう。

あの日を境に人生が変わった。自分が楽に呼吸できる場所を、「2」と心に思い描けるようになったのだ。彩子の家にはダイアナの欲しいものすべてがあった。こんな風にしたい、と夢見ていた光景が自然に存在していた。

「ダイアナちゃん、いらっしやい。彩子があなたの話ばかりするから初めて会った気がしないわ。はじめまして」
「はじ、め、まして……」

大人からこんな風に丁寧に接してもらったことなどない。そもそも友達の家に招待されるのも、これが初めての経験なのだ。玄関で出迎えてくれた中年の女性は化粧気がなく、皺や白髪も目立つのに、透き通るように綺麗で汚れない空気をもとっていた。紺色の眼鏡に長い灰色のカーデイガン、あせた緑色のゆつたりとしたパンツという地味な格好なのに、なんとも優雅で好ましい印象だ。この人なら私をわかってくれる、とダイアナは直感した。

神崎家の門をくぐった瞬間から、心臓が飛び出しそうになっている。なんとという広い家だろう。ティアラとダイアナが暮らすアパート全体よりもはるかに大きな、生クリームみたいななめらかな風合いの筒型の二階建てだ。英国風の庭には季節の花が「秘密の花園」のように咲き乱れていた。一見無造作でありながら、整然とした学校や公園の花壇より、よっぽどあかぬけている。

「うちのママ、年取ってるでしょ？」

彩子ちゃんは少しも恥じる様子はなく、「3」とささやきかける。教室を離れて、彩子ちゃんと過ごす幸せに目がくらむ。みんなが一目置いている彼女を独り占めできるなんてなんという贅沢なのだろう。味噌歯のみかげちゃんを咄嗟に思い浮かべる。日曜日、彩子ちゃんの家に行くの楽しみ！と、わざと彼女に聞こえるように大きな声で言った時のあの口惜しそうな表情。ちよつと意地悪だったかな、と反省したけれど、かなり《4》した。

「パパはもつともつと年上なの。もうすぐ散歩から帰ってくるけど、きっとダイアナはびっくりすると思う。私はね、すごく遅くにごきた子なんだよ」

お母さんの後に続いて広々とした居間へと向かいながら、彩子ちゃんは足下にまわりつく子犬を抱き上げた。

「この子、シェットランドシープドッグのダン。ね、ダイアナ、だっこしてみる？」

真っ黒な目は濡れていて焦げ茶の毛はまるでキャラメルのようになめらかだ。抱きたい気持ちはあるけれど犬に触るのは初めてで、つい□が引けてしまう。以前、酔っ払ったティアラが止めるのも聞かず民家の庭に入ってしまった、飼犬に噛まれたのを目の前で見て以来、すっかり犬が怖くなった。でも、時間をかければ、ダンとは仲良くなれる気がした。優しい目をしてたから。

それにしてもなんて素敵な家なんだろう。家具や壁紙がすべて、ティアラがときどき飲んでいる牛乳が多めのカフェオレみたいな色で統一されているせいか、穏やかで心地良い。びっくりするほど物が少なく清潔で、さっぱりしている。真っ先に□を引いたのが、天井まで届く壁一面の本棚だ。難しそうな分厚い本から英語で書かれたもの、料理の本、写真の本、文庫本……。大人の本も子供の本も隙間なく並べられている。

「本屋さんみたいなおうち……」

そうつぶやくと、お茶とお菓子を運んできた彩子ちゃんのお母さんは笑った。

「我が家は本が多いから、家族全員の本をみんなここに集めることにしているの。ダイアナちゃんはどうしても読書家なんですってね。なんでも好きなものを借りていいのよ。ねえ、ダイアナちゃんは どうしてそんなに本が好きなの？」

ふいに尋ねられて、ダイアナは考え込んでしまう。お母さんがせかしたりしないので、ゆっくり考えて答えることができた。

「ええと、その……。小さな頃、よく寝る前にお母さんがお話ししてくれるのが好きだったんです。なんだか違う世界に行けるみたいで……。それで、もつともつとお話ししてって頼んだら、お母さんはあんまりお話をしらないし忙しいから、自分で字を覚えて早く本を読みなさいって言われて、それで……」

「まあ、ダイアナちゃんのお母様は素敵な方ね。とてもいい育て方をなさったのね。ダイアナちゃんもきつと□□した素敵な女性にな

るわ——」

彩子ちゃんのお母さんの言葉に、ダイアナは心底驚いた。嘘ではない証拠にその目はあたたかい。ティアラを誰かに褒められたのなんて初めてで、急に呼吸が楽になる気がした。

彩子ちゃんにすすめられ、座り心地の良い木の椅子に腰掛けると、広々としたテーブル越しに庭がよく見えた。

「はい、ゼリーと紅茶よ」

ダイアナは目をぱちくりさせ、彩子ちゃんのお母さんの差し出した湯気の立つマグカップと半分に分ったグレープフルーツに詰まったゼリーを見下ろす。ダイアナにとってゼリーとは、コンビニで買う、透明のカップに入った色が濃いものだ。ところが彩子ちゃんの家では、生の果実をくりぬいて器として使っているのだ。彩子ちゃんにならってひとすくい口に運ぶと、爽やかで香り高い甘酸っぱさがぶるんと弾けた。あまりの美味しさにしばし恍惚となる。ぽつりとした素焼きのマグカップは両手で持つと、なんだかほつとする。人に出された温かい飲み物っていいな——染み込むように広がる安堵感に、ダイアナはひとり浸った。

〔柚木麻子「本屋さんのダイアナ」による〕

問1 ——線①「ぞくぞくさせられる」という気持ちを具体的に言いかえた十六字の表現を、文章中からぬき出して答えなさい。

問2 ——線②「自分の見込み」の内容として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ ダイアナは本が大好きなので、雑誌の仕事をしている父と本に関して話が合うだろうということ。
 ロ ダイアナは、きつと自分の名前に対してのコンプレックスを持っているにちがいないということ。
 ハ ダイアナは魅力ある女性だから、とても起伏に富んだ人生を送る可能性を秘めているということ。
 ニ ダイアナはその名前のよさを理解してくれる友人が少なく、心細い思いを抱いているということ。

問3 【A】に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ ゴージャス ロ デラックス ハ バラエティ ニ ドラマチック ホ クライマックス

問4 ——線a～dの「の」と同じ働きのものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

- イ 兄さんがさつき見たのはまぼろしだった。 ロ 三角おむすびの方がおいしく感じられる。
 ハ 友達はあきらめたけれど君はまだ行くの。 ニ 父の管理している高級マンションに住む。
 ホ 私、そういうふうと言われるといやなの。

問5 【B】に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 印刷 ロ 監修かんしゅう ハ 出版 ニ 著作 ホ 編集

問6 熟語の読み方は音読みと訓読みの組み合わせであるが、〰線(1)「絵本」、(2)「物語」、(3)「場所」と同じ組み合わせのものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

- イ 台所 ロ 野原 ハ 午後 ニ 湯気 ホ 部屋

問7 《1》《4》に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

- イ はっきり ロ せいせい ハ くすくす ニ ほくほく ホ わくわく ヘ ぴったり

問8 〰線③「夢見ていた光景が自然に存在していた」とあるが、そう感じたダイアナの心情として最も適当なものを、次の中から

一つ選んで記号で答えなさい。

- イ たくさんの本があるので、本屋さんを開くというかねてからの夢に近づくことができうれしかった。
 ロ きらきらした華やかさはないが、それがかえって落ち着いた雰囲気ふんいきを作りだし穏やかで心地よかった。
 ハ 優雅で好ましいお母さんを見ることによって、自分のあこがれる家族を見ることができてほっとした。
 ニ 自分のいる場所とは異なる華やかな世界で、高価なものばかりがそろっている点にあこがれを感じた。
 ホ 彩子ちゃんの家遊びに行ったことにより、みんなが一目置いている彩子ちゃんをひとり占めできた。

問9 〰線④「あかぬけている」が正しく用いられている文を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 気をつかっているから、あの人の服はあかぬけている。
 ロ 学校で注意を受けるくらい、筆箱があかぬけている。
 ハ 大掃除お掃除の後は、どの教室も本当にあかぬけている。
 ニ 彼はクラスの皆みなに笑われるほどあかぬけている。

問10 — 線⑤「□が引けてしまう」、⑦「□を引いた」の□に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

イ 手 ロ 目 ハ 肩かた ニ 首 ホ 腰

問11 — 線⑥「でも、時間をかければ、ダンとは仲良くなれる気がした。優しい目をしてたから」にみられる表現の工夫を何というか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 直喩ちよくゆ ロ 擬人法ぎじんほう ハ 倒置法とうちほう ニ 体言止め

問12 — 線⑧「とてもいい育て方をなさったのね」とあるが、彩子の母はティアラのどのような育て方を「いい」と褒めたのか。それを説明した次の文の「 」に当てはまる十五字以上二十字以内の部分を文章中からぬき出し、初めの五字を答えなさい。

「 」という言葉に表れる、子ども自身での成長をうながす育て方。

問13 — 線⑨「□□した素敵な女性」の□□に当てはまる漢字二字の言葉を、文章中からぬき出して答えなさい。

問14 — 線⑩「なんだかほっとする」とダイアナが思った理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 今まで口にしたことのないゼリーや紅茶をすすめられ、自分が夢見ていた高級品に囲まれた暮らしだと再認識したから。
 ロ 手作りのゼリーをすすめられたときは食べ方がわからずに不安だったが、彩子にならって食べることで理解できたから。
 ハ 温かい紅茶で満たされた手触りのよいマグカップに、自分があこがれていた人としてのぬくもりと優しさを感じたから。
 ニ 最初は経験したことのないおもてなしに驚いたが、温かい家庭で育った彩子を友人として選んでよかったと思ったから。

問15 この話の元の文章では、話の視点が変わる段落の前に一行空けの部分があるが、それはどこか。一行空けとするのに最も適当な部分を探し、その直後の段落の初めの三字を答えなさい。

二

次の文章を読んで、後の1～11の問いに答えなさい。(問題の都合上、本文を変えているところがあります。)

私たちはいつも、時間というものを意識しています。生活においては食事や出勤など、何時にその行為を行うかが決まっている物事も多く、時間を気にせずに1日を終えるようなことは、現代においては少ないのではないのでしょうか。このような時間は、何かの「基準」にもとづく、物理量としての時間といえます。

一方で、楽しいときは、1 ように感じ、苦しいときは 2 ように感じるなど、時間という感覚には主観もかわっています。年齢を重ねるほど、時が経つのが早く感じる、ということも誰もが経験することでしょう。

時間はこれだけ私たちの生活とも感覚とも密接にかかわっていますが、「A」、人間の感覚器には、時間に関するものは存在しません。長さであれば、目で見てわかります。手の大きさなどで比較することもできます。暑さや寒さ、圧力なども皮膚で感じ取ることができます。「B」、時間については時計によってしか計ることができないのです。

一方で、長さや温度などに比べて、時間は最も精密に計測できる物理量でもあります。時間とはこのように不思議な概念であり、物理量ということができません。

時間というものについては、これまで古今東西の哲学者、科学者たち、「C」アリストテレス、ガリレオ、ニュートン、カント、アインシュタインなど、そうそうたる人たちが考えてきました。ではその正体は何かといっても、やはり実体がない「概念」なので、言葉で表現することは難しいでしょう。

② 時間とは何かをあえていうならば、「変化」に必然的に付随する概念、ということができると思います。たとえば、砂時計で流れ落

ちていく砂を見れば、時間が流れていること自体は認識できます。でも、感覚器をもっていないので、私たちには「どれくらい」という認識はできず、砂が完全に流れ落ちて初めて区切りができて、3分なり5分なりという決まった時間を認識できることになります。そして、砂が落ちきった砂時計は変化しないので、そこからは何の「情報」も取り出すことができません。

1日という単位も、連続的に流れていく時間に1日という時間で区切りをつけているわけです。このときの区切る基準は天体や季節の「周期的変化」です。それをもとに日、月、年という時間で区切って、私たちは時間単位を認識していることになりました。

③ 人間はどのように連続的に流れる時間に、何らかの区切りをつけてきました。その区切りが「単位」というものです。日常生活でも季節ごとに行事が置かれています。これも流れに区切りをつけている良い例だと思えます。

この後は、あまり哲学的議論には深入りせずに、時間の素朴なイメージをつかむために歴史をふり返ることにしましょう。人類最初の時計というのは、「暦」といわれるものです。分かり易く言うとカレンダーであり、これは1日を単位とする一覽式のデジタル時計といえます。暦とは、太陽や月の動きを基準に時間の流れを測り、体系づけていくこと。太陽と月が基本中の基本で、何千年もの間、人間にとっては、これが時計代わりでした。

太陽と月、二つの天体の動きを基本にすることは、異なる周期をもつ現象を組み合わせる、ということでもあります。要するに、観察対象が一つでは時間を計るのに都合がよくないわけですね。つまり、このように時間を計るにあたっては、最小公倍数の考え方がもとにあるということになります。素数の考え方、といってもよいでしょう。暦の誕生は、同時に、数学の芽生えでもあったのです。

また、暦は日食をはじめとする天体現象の「予言」にも必要でした。昔、暦をつくることは、天文学ではありますが「占星術」で

あり、政治ともほとんどチョクケツ⁽¹⁾していたといえます。古代の為政者（王）は、そのような天の変化、すなわち天変^{テンベン}などを全て把握して予言し、それを民衆に知らせることによって權威を保っていたようなところがあるのです。たとえば中国では、皇帝は「時をも支配する存在」とされてきました。この表現などは、暦を司ることと権力の関係を非常によく表しているといえるでしょう。

暦を把握しておくことには、現実的な理由もありました。農業にとって、いつ梅雨に入り、いつ台風が来るのか、それによっていつ川の氾濫があるのかということは、その年の収穫量を左右する非常に重要な情報であるからです。民を養っていくという意味においても、暦を知ることには非常に大切なものだったわけです。だから天文学と政治は、古代においてはほとんど一体となっていました。

「時計」は暦からスタートし、その「時計」を見ながら生活に應用していたわけですが、太陽の動きを時間観念の基本におくのは、おそらく人間だけではなく、他の動物もそうでしょう。夜行性の動物もいますし、そこに周期があることを認識していることがわかります。とにかく、太陽の動きが一番わかりやすいのです。道具が何もなくとも、太陽を見れば、朝・昼・夕方・晩、ということがわかりますから。

とはいえ、この段階では、1日の長さや季節の移ろいはわかっても、現在、私たちが普通に認識している「1分」「1秒」という細かい時間の概念はありません。⁵そもそも当時の人々としては、「太陽が出たら起きて働いて、日が沈む前にかえって寝る」といったような大雑把な概念しか必要でなかったはずですが、それが、ある時点から「」として区分されるようになりました。⁶

最初の人工的な機器としての時計は、紀元前3000年頃のエジプトでつくられた日時計です。⁽²⁾（キゲンはそれ以前のバビロニアにあるといわれています）。日時計は、太陽の動きに従って時計の部品の影が動いていくことを利用し、影の届く位置に目盛を入れて、1日を分けていったものです。この時代の感覚では、少なくとも今の時間の2時間程度に区分しておけば十分でした。しかし、人間に

は正確な時計がほしいというヨッキキュウ⁽³⁾が尽きることなく存在し、そのヨッキキュウゆえに、時計は現在まで進化し続けてきたのです。

西洋の時計の歴史をみると、日時計の次に水時計が出てきます。水時計も、やはり紀元前16世紀頃のエジプトで発明されたといわれています。同じころ、バビロニアにも水時計はあったようです。

水時計があれば、太陽の出ている夜でも時間が計れます。ボールに小さい穴を開けておくだけの、シンプルな構造です。そのボールに水をいっぱい入れます。水が穴から流れ出し、すべてなくなるまでの時間は一定であることから、ボールの内側に目盛をキザン⁽⁴⁾で時を計っていました。しかし、残念なことに、これは北ヨーロッパでは使えませんでした。冬になると凍ってしましますからね。持つて行った人はさぞショックだったでしょう。

その後に発明されたのが砂時計です。ボールの代わりにガラス細工を用い、水の代わりに砂を用いるというわけです。古代ギリシャ、ローマの頃には存在していたという話もありますが、イタリアで精巧なガラス細工がつけられるようになった11世紀以降、コンパクトで持ち運びに便利なこともあって、航海などに用いられたと考えられています。砂時計の登場で3分でも5分でも自由に計れるようになりましたが、すぐに砂が落ち切るので、しょっちゅうひっくり返さなければならぬ、という面倒なものでもありました。

〔安田正美「1秒って誰が決めるの？」による〕

二二

次の文章を読んで、後の1〜7の問いに答えなさい。(問題の都合上、本文を変えているところがあります。)

A 早春や吾も鴉もひそとゐて

鈴木真砂女

いまは「ひそとゐて」でも、遠からず始動するという気分を感じられる句です。そんな二月、どこから聞こえてくる唱歌に「早春賦」があります。「春は名のみ風の寒さや 谷の鶯 歌は思えど」ではじまる、私たちの世代にはなじみ深い歌です。万事スピード先行のいまの時代に、このような古い歌はもう絶えるのではないかと思つて久しいのですが、たとえば、たまたま乗り合わせたタクシーで流していたラジオ番組からとか、気象情報の合間の話題でとか、思わぬところから聞こえてくることがあります。

そんなとき、いい歌だなあと感じ入りながらも、この時期の風や実際の鶯のことなどは知らなくても「早春」という季節の概念を知る手っ取り早い唱歌が、この「早春賦」なのではないかと風刺的に思うこともあります。そんなことを思うのも、私にはこの唱歌にかわる強烈な思い出があるからです。

もう三十年近くも前、知人の見舞いのために入入りしていた老人ホームでのことです。まだ七十代半ばというのに少し痴呆の症状が出ていて、ときに奇怪な行動をするというKさんという女性と知り合いになりました。私が妙だと気付いたのはある年の夏、Kさんが来客用の靴箱の前で腰を折って、スリッパを出して入れてまた出してという行為を繰り返しているのを見た時でした。ところが私を迎えに出てきた職員が「おお、きれいに揃ったわねえ。これで全部終わったね。ごくろうさま」と声をかけたのです。そのとき、Kさんはまたとないような至福の表情を私に向けたのです。聞けば、Kさんの動作は、自分だけの世界で「1」をしていたのだというのです。農作業のみの日を過ごしてきたこの女性には、方形に仕切られた靴箱が植田に見え、スリッパが早苗に見えていた

らしいのです。

収容人員がわずか三十人程度の施設で、職員が一人一人とても親しく付き合っていたので出来たことだとは思いますが、年配の女性職員は、長く農作業をして暮らしてきた人の記憶が、このような傍目には奇怪に見える動作となつて現れていたことを変だとは思わずに、Kさんにだけ見える田の風景をともに見てあげていたのです。私も思わず「ごくろうさまです」と言いましたが、たぶんその時の私の声はきこちなかつたと思います。

そのKさんがもう一つ繰り返していた農作業に「麦踏み」がありました。ある年の二月、職員から「麦踏みが始まったので、暇があったら来てあげて」と電話がありました。Kさんが木造の廊下を行ったり来たり動作を始めたのです。他の人たちは仲間どうし寄り集つてお茶を飲んだり、お喋りを楽しんだりして寒い日を過ごしていましたが、Kさんのみ、過去の詰まった幻想の世界に入つて寒い麦畑で麦踏みをしているのです。

B 麦踏みのまたはるかなるものめざす

鷹羽 狩行

麦踏みとは、この句のように、はるかなるものを見ながらただ畝の麦の芽を踏むという反復の作業です。そのころには私もこの女性の行状が理解できていましたので、寒い廊下を行き来する動作をさりげなく見て、「寒いね」「まだ終らないの」と声をかけていたが、とても不思議に思ったことは、この女性がけつして季節をあやまたずに四季に合った農作業を開始するということでした。

その木造二階建ての老人ホームは林の中ほどにありましたので、部屋の窓の手摺に鳥が止まるような、部屋の窓を木々の枝が覗き込むような、季節に密着した環境でした。そんなこともあつてか、長く季節とともに暮らしてきた人たちは、どんなに設備が貧弱で

もここがいいと言いついていました。そのことを言葉でうまく伝えられないKさんは、言葉以前に自分で知っている季節の農作業を動作で表していたのだと思うのです。他人には模倣と見えた作業は、〈体内季節〉に導かれた自然の動作だったのだと思います。

やがて施設から去っていったKさんは、驚くべきことに前夜のささやかな送別会の席で、「早春賦」の歌詞を一字一句も違えずに三番まで歌ったそうです。一番だけは歌えても二番三番まで知る人はなかったとのこと。

後日、厨房で働いていた若い女性から、「あの人、麦踏みの仕事が好きだったんだって。麦を踏みながら、一日中心おきなく眺められる山があつて、その山のむこうに実家があつたんだって。それに麦踏みをしなごらだと、好きな歌が歌えたんだって」というようなことを聞きました。たぶん、Kさんが元気なころにそんなことを話していたのでしょう。痴呆状態のKさんが、スリッパを出し入れしたりする田植えを夏に、寒い廊下を行き来する麦踏みを二月にと、該当時節を外さずにやっていたのも、生涯の大方を田んぼで過ごしてきた一人の女性に組み込まれていた〈体内季節〉の発露だったのだと知ったとき、私たちの先祖は季節をことさらなものとは思わずに、季節のことごとくを知り尽くして生きてきたのではないかと思いました。

「氷解け去り葦は角ぐむ さては時ぞと 思うあやにく 今日もきのうも 雪の空」は「早春賦」の二番の歌詞です。

C 四五枚の田の展けたる雪間かな 高野 素十

雪間に光る田の地肌。【 2 】を知らせてくれる句です。

〔宇多喜代子』新版 里山歳時記』による〕

問1 — 線①「おお、きれいに揃ったわねえ。これで全部終ったね。ごくろうさま」とあるが、この職員の言動について説明した文として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ Kさんの行動は痴呆によるものであつて、今更注意しても仕方がないと諦めている。
- ロ Kさんの行動が結果的に靴箱を整理することにつながっているため、感謝している。
- ハ Kさんの行動を妙だとは思ひはするものの、喜んでもらうために褒めたたえている。
- ニ Kさんの行動の理由がどんな記憶によるものかを考え、それを尊重して接している。

問2 【 1 】に当てはまる三字の言葉として最も適当なものを、文章中からぬき出して答えなさい。

問3 — 線②「私の声はきこちなかった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ Kさんは私にとって知り合いとはいふものの、Kさんの過去の生活の一部始終を知らされているわけではないから。
- ロ Kさんにとって長年の経験から生じた行動であると説明されても、そのようなことがあるとはまだ半信半疑だったから。
- ハ その老人ホームの職員のように四六時中一緒にいるわけではないので、私にはKさんの性格まで理解できなかったから。
- ニ 私は農業の経験がないので、Kさんの奇怪な行動の意味を聞いても農作業の動作とのつながりを想像できなかったから。

問4 —線③「この女性がけっして季節をあやまたずに時季に合った農作業を開始するということでした」とあるが、その理由は何か。文章中の語句を用いて、二十五字以上三十五字以内で答えなさい。

問5 —線④「他人には模倣と見えた作業」とは具体的にはどのような行動か。俳句Bより後の文章から十二字でぬき出して答えなさい。

問6 「 2 」に当てはまる表現として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ やがて来る春 ロ すでに来た春 ハ まだ^{まだ}兆^{きざ}しの来ない春 ニ 今過^{いま}している春

問7 A、B、Cの俳句について次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 切れ字をすべてぬき出して答えなさい。

(2) Bの俳句から季語をぬき出し、その季節を漢字一字で書きなさい。

